

黒船式

映画文学人生論

0061) 懐かしい年への手紙 参考：万延元年のフットボール
0071) 春 島崎藤村 参考：夜明け前
0081) 竜馬がゆく 参考：翔ぶが如く
0091) 婦系図 泉鏡花 参考：金色夜叉 尾崎紅葉
0101) 露団々 幸田露伴 参考：五重塔

ペリーの艦隊が浦賀にきた真相は、もとは
といえば鯨がめあてだったらしい

黒船篇の五篇をなんとか読了してから二年たった。すこしは心の糧になるかと思っただが、正直に
いってあまりそんな気がしない。

そこで、こんどは、同じ作者の別の作品、あるいは類似の作品を読んでみた。一篇だけ切り離して読むよりも、複数の作品を関連づけて読むほうが理解がすすむような気がしたからだ。

万延元年のフットボール↓懐かしい年への手紙

夜明け前↓春

翔ぶが如く↓竜馬がゆく

金色夜叉↓婦系図

五重塔↓露団々

『万延元年のフットボール』と『竜馬がゆく』——純文学と大衆文学とを関連づけるキーワードをしいてあげるとすれば「鯨」だ。漂流中にアメリカの捕鯨船に救われ、捕鯨を学んで幕末に帰国したジョン万次郎は、両作品に登場している。

「ペリーの艦隊が浦賀にきた真相は、ずっとのちになって竜馬はイギリス人グラバーからきいたものだが、もとはといえば鯨がめあてだったらしい」（『竜馬』）。「手紙は、若者がジョン万次郎の捕鯨船に乗り組んで、文久二年暮に品川を出帆したことを報告している（『万延元年』）。



黒船式——映画文学人生論

『露団々』にも捕鯨で大富豪になったアメリカ人が登場する。当時のアメリカは捕鯨大国だ。鯨はアメリカの文明に多大の貢献をした。

『春』と『婦系図』、それに『懐かしい年への手紙』を関連づけるキーワードは翻訳？ 岸本と青木は英語、早瀬はドイツ語の翻訳でつながる。さらに、『万延元年のフットボール』の密三郎も翻訳者で、『懐かしい年への手紙』のギー兄さんは『神曲』の翻訳を読む。

人生とは何かを日本人が考えるようになったのも黒船来航による影響だろうか。『竜馬がゆく』の主人公は「人間はなんのために生きちよるか」と問い、「事をなすためじゃ」と言っている。

もつとも、坂本竜馬が実際にそんな自問自答をしたかどうかは疑わしい。作者の司馬遼太郎が竜馬に言わせたセリフにすぎないかもしれない。

『春』の青木は恋愛至上主義をとなえたが、生活と恋愛との矛盾に苦しみ、自殺した。岸本は恋愛が実らなくても自殺せず、「ああ、自分のようなものでも、どうかして生きたい」と言った。

しかし、ただ生きるだけでは満足できない。人はなんによって生くるか？ 『婦系図』の早瀬主税は師への義理と恋愛の筋を通す心意気を示した。『春』の青木は『家』を書き、『新生』を書き、さらに、『夜明け前』を書いた。

アメリカのぬらした袖も土と成り 井上剣花坊